
闇夜の桜と春の月

黒影美野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の桜と春の月――

【Nコード】

N28760

【作者名】

黒影美野

【あらすじ】

「白夜兄ィちゃんの馬鹿ぁー！！もう知らなあいー！！」

「・・・嫌われた・・・」

「ちよっ、白夜？！砂化してるぞ！！？大丈夫だ！！都輝夜は、ふざけてるだけで、本気では言っていないぞ！！？」

「・・・よかった・・・」

「はははっ」（面倒臭い、兄妹だな・・・）

もう・・・なんと言うか・・・カオスだ

黒田龍野が実家に帰った時の日常です。

え．．．ええエエエエエエえ！！？（前書き）

今回は、もう．．．．．勘弁して下さい．．．．．（↑意味わからんわ）

え・・・ええええええええええ！！？

桜・・・・バラ科サクラ属サクラ亜属 *Prunus subg. Cerasus* またはサクラ属 *Cerasus* の総称で日本で最も知られている花の一つ。

サクラは突然変異が多い植物として知られており、花弁や雄蕊の変化、花の大きさ、色の变化、実の増減などが多分に見られる。時には枝ごとに突然変異を起こすこともある。この特徴から、様々な場所にあわせて変化し、多くの自然種が生まれている。また、自家不和合性を持つものも多いため一代限りの突然変異も稀ではない。自家不和合性を持つ場合、次の代には同じ特徴が受け継がれないことが多い。

（＊注意＊ウィキペディア【サクラ】項、【簡易説明】及び【突然変異と品種改良】より抜粋）

鬼・・・・日本の妖怪。民話や郷土信仰に登場する悪い物、恐ろしい物、強い物を象徴する存在。
そこから鬼という言葉には「強い」「悪い」「怖い」という意味もある

（＊注意＊ウィキペディア【鬼】項より抜粋）

羅刹・．．．、仏教の天部の一つ十二天に属する西南の護法善神。羅刹とも言う。ヒンドウー教に登場する鬼神ラークシャサが仏教に取り入れられたものである

羅刹とは鬼神の総称であり、羅刹鬼・速疾鬼・可畏とも訳される。また羅刹天は別名涅槃底王（Nirrti-rajaの音写、ラージャは王で、ねいりちおう、にりちおう）ともいわれる。破壊と滅亡を司る神。また、地獄の獄卒（地獄卒）のことを指すときもある。四天王の一である多聞天（毘沙門天）に夜叉と共に仕える（＊注意＊ウィキペディア・羅刹検索【羅刹天】より抜粋）

【備考】羅刹の男は醜く、羅刹の女は美しいとされ、男を羅刹娑・羅刹婆（ラクシャーサ、ラークシャサ、ラクシャス、ラクシャサ、ラクササ）、女を羅刹私・羅刹私・羅刹女という。また羅刹女といえは法華経の陀羅尼品に説かれる十羅刹女が知られるが、これとは別の十大羅刹女や八大羅刹女、十二大羅刹女として、それぞれ名称が挙げられており、さらに孔雀経では72の羅刹女の名前が列記されている

（ウィキペディアより抜粋）

夜叉・．．．訳：暴悪・捷疾鬼・威徳、別名薬叉）は、古代インド神話に登場する鬼神。のちに仏教に取り入れられ護法善神の一尊となった

夜叉には男と女があり、男はヤクシャ（Yaksha）、女はヤクシーもしくはヤクシニー（Yakshini）と呼ばれる。財宝の神クベ

ーラ（毘沙門天）の眷属と言われ、その性格は仏教に取り入れられてからも変わらなかったが、一方で人を食らう鬼神の性格も併せ持った。ヤクシャは鬼神である反面、人間に恩恵をもたらす存在と考えられていた。森林に棲む神霊であり、樹木に関係するため、聖樹と共に絵図化されることも多い。また水との関係もあり、「水を崇拜する（yasy-）」といわれたので、yaksya と名づけられたという語源説もある。バラモン教の精舎の前門には一対の夜叉像を置き、これを守護させていたといい、現在の金剛力士像はその名残であるともいう

悪鬼であつた者が多く、例えば金剛夜叉明王、大威徳夜叉明王等、夜叉の名前を冠する仏はインド神話では悪鬼神だったことが分かる。仏教には他にも夜叉神として鬼子母神（別名大薬叉女 だいやくしやによ）・荼枳尼天などが知られている。

夜叉はその鬼神としての残虐な性格が強調されることとなり、恐ろしい地獄の獄卒とも見られるようになった。だが、同時に薬師如来の十六大薬叉大将や釈迦八部衆の一に数えられ、仏法の守護者としての性格も保持したまま現在に至っている

（＊注意＊ウィキペディア【夜叉】項より抜粋）

・・・あゝ疲れた、はい、ウィキペディア抜粋事項終了！！

次、オリと原作より←

夜叉姫・・・龍野（姫野）が攘夷戦争時に呼ばれていた呼び名、味方陣地では白姫と呼ばれることが多かったが、姫野はその呼び名

を嫌っていた……本人曰く『そんな、大層な者じゃないのに、
何で【姫様】なんて呼ばれないといけないの?』っだそうだ。ちな
みにヒメヤの本当の漢字は姫桜^{ヒメヤ}と、書き思いつきり当て字になるが、
姫野と言っ漢字を昔から使う(オリジナル)

白夜叉……攘夷戦争時の銀時の呼び名、その姿と戦い方は『
その者、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆ける姿は正しく、夜叉』と
言われ、敵からも味方からも恐れられるほど凄まじかったよう(汗)
(原作&作者妄想より) ↑駄目じゃん!?Σ(。。(。)

もう・・・寝ていいっすか???

龍野

「うん、もう一生寝ていいよ?」

え?それどういう・・・って、何?その手に握られてる刀は?
!え?嘘だよね??りゅ、龍野くぅん!!??!?!?ワアアアアア
アアアア!!??ってか、ギアアアアアアアアアアアア!!?
?!?!

龍野

「って、まだ何もやってないんですけど・・・」

え．．．ええエエエエエエえ!!? (後書き)

もう私から言う事はない)．．．は?)

まあ、よくあるじゃないの（前書き）

短っ、なにこれ駄文っ

うっわ、うっわ………

まあ、よくあることじゃの

「ん？ここは……何処だ？」

歳三は見知らぬ和室で目を覚ました

上体を起こすと、周りには総司・原田・平助・一・千鶴がいる

「やっと起きたがか」

不意に声が聞こえ、そちらを振り向く

そこには、絢爛な着物を一枚纏い、体勢を崩している青年

銀色と黒色の髪が混ざっている長髪癖毛に紅眼の青年が、此方を見下すように見ている

「ん……ここは、って土方さん」

「うつ……」

「ふあゝよく寝た……？」

順々に全員起きる

「デメエ等」

「おまん等よく寝るの、半分呆れとつた所じゃ」

「あんた・・・誰だ？」

「起きた後の第一声はそれかいな・・・っと言うか、その前におまん等、人に名前を聞くときはまず自分からって習わなかったんか？ま、いいがの・・・ワシの名前は桜野、黒田桜野じゃ、以後は桜野とでもよんでくれや」

「此処は何処だ？」

「名前を名乗ったってエのに、自分の名前くらい言えってんだ」

「・・・土方歳三」

「沖田総司」

「原田左ノ助だ」

「斉藤一」

「風間千影だ」

「ゆ、雪村千鶴です」

「ほ、鬼の頭領と女鬼に、羅刹の人間……か、面白い組み
合わせじゃの」

「!」

「貴様……なんでそれを」

「鬼のことか？風間……それはワシも鬼だからじゃ、羅刹につ
いては別じゃがの」

「鬼?!」

「おまん覚えとらんのか、紅桜鬼のワシの事」

「……!!お前、桜野か……」

「腐れ餓鬼……口の聞き方に気をつけるとまた死なすぞ……
」

「!」

「なんての、嘘じゃわい嘘（半分本気じゃったが……」

イヤッフー!!!!!!!!!!

土方

「ここはどこなんだ？」

桜野

「ここは、桜山・・・京の都寄りの近江、琵琶の湖の中心にある離島の山の中、鬼の屋敷じゃ」

土方

「鬼？・・・」

桜野

「ま・・・いわば、ワシの屋敷なんじゃがの」

沖田

「あんたの？」

桜野

「まあな、ほかに質問は？」

平助

「ここは、他にも鬼とか住んでんのか？」

桜野

「あゝ、住んでるの、鬼の他に九尾狐・白蛇・首無し・落ち武者・河童・木霊・大神……そして、人、まあ、大まかに分けるとだいたいこんなもんじゃな」

土方

「人……だと？」

桜野

「ああ、人じゃな……別段おかしいことじゃないじゃろ？人種・種族、肌の色や、瞳の色・髪の色が違っただけで、生き物っちゅうのはかわらんし、場合によっては愛し合い、共に暮らす……この次期頭首も、そんな中で生まれたんじゃないからの」

風間

「次期頭首だと？」

桜野

「ああ、そうじゃ」

風間

「馬鹿な……紅桜鬼の死んだお主の息子の鬼夜の次に来る頭首は決まっておらんと聞いているはずだ」

桜野

「そいつ……まあ、ワシの孫なんじゃが、に頼まれたんじゃよ、俺は、鬼としても生きるが半分は人間なんだから、人間としても生きたいからもう少しの間は俺が若頭ってエのは口外しねエでくれ、とな」

千鶴

「半分、人間？」

桜野

「人間と鬼の間の子供なんじゃ、つまりは、半妖」

平助

「ふん、そんな奴がいるんだ」

桜野

「しかも、身体能力と生命力は元々人間並で、外見だけが鬼の奴じや」

風間

「ふん・・・鬼の風上にもおけないな」

桜野

「もう無いか？・・・と、いうかこれ以上は話さんぞ、面倒臭い・・・
・・・つう事で、輝ア！！！」

スッ

輝

「何ですか？桜野様」

桜野が輝と部屋の外へ向かって呼ぶと、少しして襖が開く

そこにいたのは、明らか人間で、目の色だけが緑色をした黒色の長

い髪をポニーテールにした綺麗な女の人

桜野

「この者達に部屋を用意してやってくれ」

輝

「はい」

輝は、すぐに返事をする、その場で立ち上がる

輝

「着いて来て下さいな」

土方達は一瞬何かわからなかったが、すぐに輝の後について部屋を出て行った

輝

「ねえねえ、私は名瀬輝っていうんだけど貴方達、名前何て言うの？」

輝は、部屋を出た途端子供のような喋り方で話しかけて来る

千鶴

「あ、えっと・・・雪村千鶴です」

土方

「土方歳三だ」

沖田

「沖田総司」

平助

「藤堂平助です」

永倉

「永倉新八だ」

輝

「あ、じゃあ駄眼鏡くんだ!!」

永倉

「駄目がn!?」「あゝ、ゴメンこっちの話」「

原田

「原田佐之助だ」

斉藤

「斉藤一です」

輝

「ふうん、千鶴ちゃんに歳三に総司に平助くん、新八・佐之助・くんね、オツケーオツケー・・・ここは、色んな人とか妖怪がいるから、また紹介するね・・・あつ、そうだ！！ここに住むんだからちよつと屋敷案内したげよっか、注意事項含めて」

千鶴

「え・・・あ、はい、よろしくお願いします。輝さん」

輝

「うん」じゃ、庭の方から行こうか・・・今の時間帯だったら、あの子達がいるはずだからさ」

千鶴

「庭ですか？」

輝

「そ、こっち側のじゃなくて、反対側のなんだけどね、って事でここから行くかな」

輝はそう言つと、目の前にあつた襖を開け、入っていく

輝

「あ、言つとくけど、この屋敷無駄にデカイから、反対がわに行きたいんだつたら、どこかの部屋を抜けないと約5km歩かないと行けないから」

千鶴

「五きろ？・・・なんですかそれ？」

輝

「あゝ．．．つまり、だいたい一里と十町歩かないといけないって事」

「『『『『『『一里イ?!』『』『』『』」

一里〓約4 k m 正確には3 . 9 2 7 2 7 2 7 3 キロメートル

十町〓約1 k m 正確には1 . 0 9 0 9 0 9 0 9 キロメートル

輝

「そつ、ちなみに、縦に横切つても大体、五町くらい歩くから、ま、抜け道があるんだけど、それはまた教え上げるね」

．．．．五町〓約5 0 0メートル 正確には5 4 5 . 4 5 4 5

4 5 メートル

あゝ．．．疲れるよ、考えただけで疲れるよ

平助

「マジかよ．．．」

輝

「マジだよ」

キヤツキヤツ

「白ちゃん！……！そっちに鞠行つたよ」

「わっ、えっと……わっわっ！……！」

「任せてろ……！」

「あー……ズルイでっせ、黒ちゃん」

「うるせえ!!白は俺が護るんじゃ!!!!」

「ははは、黒翼、ありがとうね」

「(ぽんっ)おおおお!!!(赤面)」

「あゝ、照れてる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2876o/>

闇夜の桜と春の月—————

2011年5月23日06時40分発行